

(様式3)

農業研究成果情報

No. 846 (平成30年5月) 分類コード 02-09 熊本県農林水産部

ヒリュウ台「河内晩柑」における適正葉果比

ヒリュウ台「河内晩柑」では、葉果比を100にすることで、商品化率の高いM～2L級果の割合が高く、収量も多くなる。また、着花・着果も安定している。

農業研究センター天草農業研究所 (担当者: 佐々木 雲海)

研究のねらい

おい性台木を利用したヒリュウ台「河内晩柑」は、低樹高になり省力化が図られる。しかし、着果過多となりやすいため小玉果率が多くなり、商品化率が低下し、さらに樹勢の低下にもつながる。そこで、商品化率の向上と連年安定生産を図るために適正葉果比を明らかにする。

研究の成果

1. 葉果比100は、葉果比70に比べて商品化率の高いM～2L級果の収量割合が葉果比130と同程度に高く、S級果以下の小玉果や3L級果以上の大玉果の割合が少ない(図1)。
2. 単位樹冠容積当たりの収量は葉果比70と100が3.5t/10a以上と葉果比130よりも多く、M～2L級果の収量割合は葉果比100が最も多い(表1)。
3. 果実品質は、葉果比70が小玉で糖度、クエン酸濃度とも高いが、糖酸比は同等で、葉果比による品質差はない(表2)。
4. 翌年の着花は、葉果比70が100、130に比べ少ない(表3)。

普及上の留意点

1. ヒリュウ台は樹冠拡大が遅く、着果するとさらに抑制されるため、未結果樹期に十分樹冠拡大を図る必要がある。
2. ヒリュウ台はカラタチ台より根域が浅いため、過乾燥にならないよう注意する。
3. 2014年～2016年に天草農業研究所で9～11年生ヒリュウ台「河内晩柑」で実施した結果である。

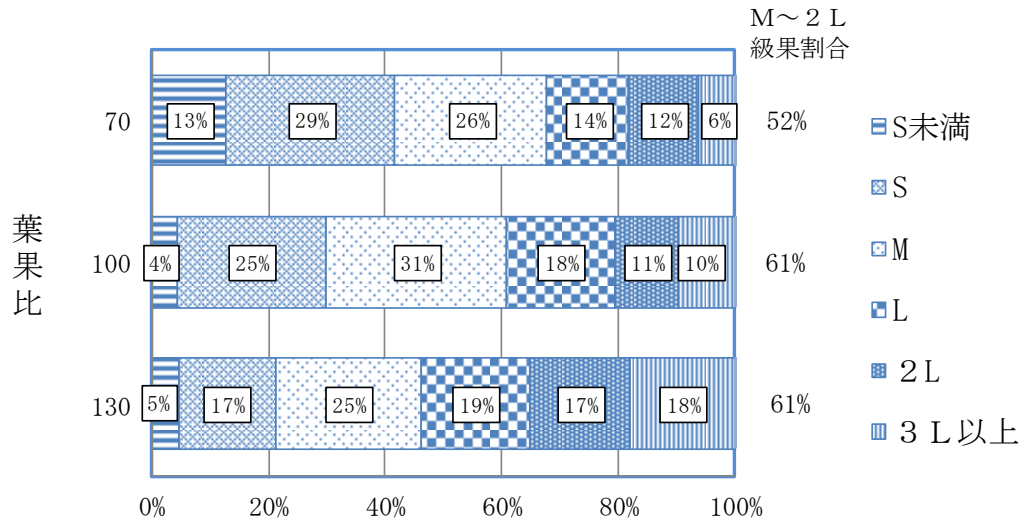


図1 ヒリュウ台「河内晩柑」の葉果比の違いが収量の階級別割合に及ぼす影響

注1) 2014~2016年の平均値

注2) 葉果比=1樹の全葉数/1樹の全着果数

表1 ヒリュウ台「河内晩柑」の葉果比の違いが単位樹冠容積当たり収量に及ぼす影響

葉果比	単位樹冠容積当たりの収量平均				10a当たり収量	M~2L級果の収量割合				M~2L級果の10a当たり収量
	2014.3	2015.3	2016.3	平均		2014.3	2015.3	2016.3	平均	
	kg/m ³	kg/m ³	kg/m ³	kg/m ³	t	%	%	%	%	t
70	4.4	6.0	4.4	4.9	3.69	49	50	57	52	1.92
100	4.2	5.8	4.4	4.8	3.59	67	52	63	61	2.17
130	3.4	4.4	3.3	3.7	2.79	60	60	63	61	1.70

注1) 10a当たり収量は植栽本数90本/10aで算出

注2) 葉果比設定は7月

表2 ヒリュウ台「河内晩柑」の葉果比の違いが果実品質に及ぼす影響

葉果比	1果重	果肉歩合	糖度 (Brix)	クエン酸濃度	糖酸比
	g	%		%	
70	343	63.7	11.5	1.28	8.9
100	360	62.1	10.7	1.20	8.9
130	364	62.2	10.6	1.20	8.9

注1) 2014~2016年の平均値

注2) 調査は2015年3月16日、2016年3月11日、2017年3月30日

注3) 葉果比設定は7月

表3 ヒリュウ台「河内晩柑」の葉果比の違いが次年度の着花・果に及ぼす影響

葉果比	新葉率	直花率	有葉花率	全花数	葉花比	有葉果率	着果率	葉果比
	%	%	%			%	%	
70	49.3	51.8	48.2	16.6	14.2	38.6	23.4	58.5
100	45.8	62.0	38.0	20.9	10.3	43.3	19.8	52.2
130	51.4	53.3	46.7	21.2	9.8	52.9	19.0	56.5

注1) 2015~2017年の平均値

注2) 葉花(果)比=葉数/花(果)数